

四円寺

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



円宗寺跡出土の瓦

平安時代の中期後半に、平安京外の北西部、双ヶ岡の北東部一帯にかけて、寺名の頭に「円」の字をつけた天皇の発願による四つの御願寺が建立されました。四箇寺は総称して四円寺と呼ばれました。四円寺は平安時代後期に鴨川の東、白河の地に建立された寺名に「勝」を含んだ六つの御願寺である六勝寺に先立つものといわれています。

また、当地には仁和四年(888)宇多天皇により建立された仁和寺があります。四円寺は仁和寺の院家として天皇の後院的性格をもち、後には近くに陵を造築、墓守とし

ての性格をもつ寺院ともなっています。

四円寺は永観元年(983)円融天皇建立の円融寺、長徳四年(998)一条天皇による円教寺、後朱雀天皇が発願し後冷泉天皇により天喜三年(1055)完成をみた円乗寺、延久二年(1070)後三条天皇の御願により建立し供養された円宗寺の四寺です。しかし、応安二年(1369)、大風で円宗寺が全壊したのを最後に、四円寺は再建されることもなく廃絶しました。また、四円寺のそれぞれの寺域を確定する絵図などは残っておらず、わず

かに文献史料に散見できるだけです。推定地についても、現在は多くの家が建ち並ぶ住宅地になっているところがほとんどです。

四円寺跡の発掘調査については1977年に初めて円教寺跡の調査が行なわれ、その後数例の調査が実施されましたが、確実な成果を得ることができませんでした。そのような状況の下、1984年から1988年にかけて、仁和寺周辺一帯では広域にわたる公共下水道工事が行なわれることになり、この地域が遺跡範囲にあたることから、工事にもなう立会調査を進めました。

そして、四円寺推定地域では予想以上の成果を得ることができました。以下、その成果を各寺ごとにまとめました。

円融寺 推定地は現竜安寺の位置とされ、四円寺のうちでは北端にあたり、最初に建てられた寺院です。円融寺にはその前身である円融院が存在したことが文献にみられます。1987年に竜安寺の南側一帯、住吉大伴神社前から竜安寺衣笠下町の調査で10世紀前半の柱穴・土壌等の遺構群を検出したことは、造営以前の状況を知ることがかりになりました。しかし、寺域が竜安寺と重なるために円融寺の解明には困難が予想されます。

円教寺 仁和寺東南の推定地にあたる花園天授ヶ岡町北部では、1986年の調査で、平安時代中期から後期の柱穴・井戸・溝などの遺構を多数検出しました。なかでも東西溝・南北溝はそれぞれ100mにわたって確認しています。溝の位置から寺の南辺・西辺を区画する溝であると考えられます。また溝に画された寺域内では、平安時代後期の遺物とともに寺の建物の一部に使用されたとされる凝灰岩の破片も出土しています。

円乗寺 円教寺の西に隣接し、円成寺と地名に寺の名が残っている地域を含めて推定されてきました。これは『扶桑略記』に仁和寺の南に円乗寺があったという記載があることや、『本朝世紀』で、位置は円教寺に接すると書かれていることから推定されています。1984年の調査では谷口円成寺町で川跡や湿地の堆積を広い範囲で確



四円寺の推定位置図 『京都の歴史』第1巻別添地図 1968年に部分加筆

認しました。そこで、ここが谷筋にあたり寺院の立地は考えられないため、高所にあたる推定地域に寺域が存在するものと考えられますが、円乗寺に直接関係する遺構は検出されていません。

円宗寺 仁和寺の南、円乗寺の西に推定されています。1986年の調査では、御室小松野町・御室芝橋町で、寺域の区画溝と考えられる平安時代後期の北辺の東西溝を170m、西辺の南北溝を120mにわたり確認しています。また溝の方位については現在の仁和寺東築地と傾きがほぼ一致しており、造営時になんらかの計画性があったことがうかがわれます。寺域内で

は溝、井戸、また建物に葺かれていたと思われる瓦が多量に捨てられた土壌など、いずれも平安時代後期の遺構を多数検出しました。出土した瓦の中には軒平瓦・軒丸瓦が多数みられました。これらの瓦には大和・播磨・丹波などの地方でつくられたものもあるということがわかり、当寺の造営の進め方を知るうえで重要な資料となりました。

以上、文献史料と立会調査で知り得た事実から四円寺をみてきました。今後、さらに調査・研究が進むことにより、四円寺の姿が明らかなるものとなるでしょう。

(加納敬二)